



Title	日本のステンドグラス
Author(s)	鈴木, 佳子
Citation	デザイン理論. 1998, 37, p. 94-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53071
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本のステンドグラス

鈴木佳子／京都市立芸術大学

○ はじめに

日本のステンドグラスの始まりから現代までの様相を 1. 技術（板ガラスの製法など） 2. ガラスと工具の使用法 3. ステンドグラスを技術およびデザインとの関連で眺める（スライドを用いて）。

○ステンドグラスの伝来

日本にステンドグラスが仕上がった状態で輸入されたのは慶応元年（1865）長崎大浦天主堂に、フランスのル・マン市にあるカルメル修道院から「十字架のキリスト」の像が贈られたのが古いとされている。（それ以後も完成品として輸入されてきた。）ステンドグラスは長い歴史を通して完成してきた。その技術やガラス・工具の直輸入から、現在、世界に注目される技術レベルに到達した日本のステンドグラスは驚くほどの早さで生活の中にとけ込んでいる。それはキリスト教会に限らず、仏教寺院・その他の宗教建築に用いられ、特に日本の場合は公共建築や商業建築の中に生き続けてきた。

○技術の輸入

技術の導入は明治19年（1886）政府による建築技師・高等職工たちのドイツ留学に始まる。明治に入って国家としての形式を急速に整備しようとした明治政府は多数の「お雇い外国人」を雇い西欧化しようとした。その中でも、建築・土木関係で有名なコンドル（Josiah・CONDER 1878年1月来日25才・鹿鳴館の建築その他）は多数の建築の中にステンドグラスを入れることになる（例ニコライ堂・岩崎邸・島津邸・三井倶楽部・古川邸など）。次いでドイツ人エンデとベックマン

を雇い入れ、丸の内一帯に本格的西洋建築による官庁街を建設する計画を立て（国会議事堂・司法省・裁判所など）臨時建築局を組織した（1887-1890）。それまでのイギリス系西洋建築技術に対してドイツ系の導入である（当時はプロシャのビスマルク時代）。この計画のためには、まず、技師・職工の養成が急務となり、建築技師3名と共に大工職（清水）・煉瓦積工・ペンキ工・ブリキ職（山田）・屋根・左官・硝子（山本）・錠前（加世）・画工（斉藤）をベックマンに依頼して、ドイツへ派遣する。4年間にわたる実地研修を終えて明治23年1月帰国、帝国国会議事堂は何回かの設計案の後中止されて、我が国の技術で完成させることになるが、エンデやベックマンの紹介でドイツに留学した人々が明治の建築の大切な部分を担うことになる。

その中の山本辰雄（後に宇野沢となる）はステンドグラスとエッチングの研究を課せられ、ベルリンのルイ・ウェストファル スタジオで3年間修業のあと明治22年（1889）帰国、翌明治23年工房を開きステンドグラスの仕事始める（宇野沢派——ドイツ系）。

その弟子に木内真太郎・別府七郎などがいて、その技を伝える。宇野沢辰雄は間もなく鉄工業に転職し、養父の宇野沢辰美が継承して宇野沢組ステンドグラス工房を主宰し、その流派に東京の（株）松本ステンドグラス製作所の松本三郎・健治（父子）、大阪では、冷光社の木内保英（木内真太郎の孫）が仕事を継承している。

宇野沢組初期の重要な仕事は、海軍省（明治27年）、司法省（明治28年）、大審判院（明

治29年), 現存するものとしては三井倶楽部, 国会議事堂。横浜開港記念館(横浜開港50年を記念して建設された公会堂・大正7年)で, ステンドグラスはペルリの乗船ホーハタン号を描いている。このデザインは大蔵省宮繕課から出され, 硝子制作・取り付けはすべて宇野沢組で行われた(色も形もいい意味で日本の作品)。

もう一方の流れ(アメリカ系)である, 小川三知(オガワサンチ)は東京美術学校・日本画科を卒業(1895), 明治33年(1900)渡米, シカゴ美術大学で油絵・陶器を学び, その後ステンドグラス及びガラスの製法の研究を積み, 明治43年(1910)帰国, 小川スタジオを開設, アメリカ風のオパールセント・グラス使用の手法を伝える(オパールに似た乳白色の美しいガラス—半透明)。ジャン・ラ・フォージやティファニーにも触れて, アール・ヌーボー風ステンドグラスの意匠と制作技術を日本に持ち帰った(慶應義塾大学図書館旧ステンドグラスの制作・大正4年原画 和田英作—現在のものは小川スタジオの流れを汲む大竹ステンドグラスが修復)。

この様にして, 持ち帰られた技術や材料は日本に根付き, 多方面に用いられるようになった。しかし, 戦争により材料の輸入が困難になり一時衰微した。また機能主義建築の時代になると, ステンドグラスは余分な装飾品として片隅に追い込まれたり, ステンドグラス受難の日々が続いたが, 高度経済成長と共に復活し材料も昭和40年代は入手が極めて困難であったのが, 近年は自由化によりどこからでも輸入出来るようになり, 海外の作家も日本に来て制作するなど国際的な交流が行われている。

日本のステンドグラスの特徴は, 宗教建築の中にある荘厳な発光体としてのガラスよりも公共空間・商業空間の中であって, ある安

らぎを与えるものが多いように思われる。個人住宅には, 昔の洋風建築ほど入ってはいないけれど, 少しずつ取り入れられてきそうな気がする。

○その他ガラスの製法の伝来と歴史について述べた。



宇野沢組ステンドグラス工房(大正初期)

山本辰雄(宇野沢辰雄)略伝

慶応2年生まれ。明治19年, 工業学校第一期卒業。正木校長より推薦を受け, ベックマン貸費生の一人としてドイツに赴く。ベルリンのルイ・ウェストファール工房にてステンドグラスの技術を修め, 明治23年1月帰朝。養父先の姓を名のり, 宇野沢辰雄となる。芝区新銭座4番地に, 宇野沢組ステンドグラス製作所を開く。これが日本で最初のステンドグラス工房となる。
主な仕事として, 海軍省(明治27年), 司法省(明治28年), 大審院(明治29年)等がある。
明治44年, 45才で病没。ステンドグラス業は養父, 辰美が引きつぐ。

木内真太郎 略伝

明治13年8月22日生まれる。
明治40年, 住友の建築科に在職中, 上司, 山本鑑之進のすすめでステンドグラスの道に入る。絵を白馬会に学ぶ。
明治44年, 東京, 芝区新銭座町4番地にて, 宇野沢辰美, 別府七郎らと仕事を行なう。
大正5年, 宇野沢組ステンドグラス大阪出張所として大阪, 末吉橋通り4丁目に開業。
ベルギー産のガラス, 日独戦争(第一次世界大戦)により入手困難となり, 英, 仏より輸入始まる。米国 モーリス社, ベーター社。英国ビルキントン社, 仏国 サンゴバン等のガラスを輸入。
大正10年 天王寺南河堀町に移転。
大正11年 瑠光社と改名。
昭和7年, 大分農工銀行, 鹿児島本願寺等のステンドを制作。
昭和12年, 戦争により鉛, 錫等の入手困難になり, 一時休業を決め, ガラス, 工具を現大東市に疎開。

小川三知 略伝

慶応3年5月生まれ。
明治28年7月東京美術学校卒業 5年後渡米シカゴ美術学校入学・卒業後アメリカで研修
明治43年(44)年帰国
大正2年東京田端町490番地に新工場を建てる。
大正4年慶應義塾大学図書館(下図 和田英作)を制作(現在の戦後大竹ステンドにより復元された。
アメリカ系の始まり。模様の入ったオパールセントを多用する。